

地平線のかなたに何が見えるのか
(What is seen beyond the horizon?)

小林 裕

はじめに

Q L Tの不思議な絆を紐解くことがQ L Tの軌跡をふりかえり、現在の位置を見極め、そしてQ L Tがどこへ向かうのかを考えるのに繋がるのではないかと思い、これをテーマとしてみたいと考えた。とは言え、私は一番の新参者で仲間に入れてもらってから3年しか経っていない。四半世紀にもおよぶQ L Tの歴史にどれだけ触れられるのか自信はないけれども、とにかくQ L Tの偉大さを私なりに紹介してみたいと思う。そうすることでQ L Tに属する人たちの心に少しでも触れることが出来るように思えるのである。

1 出会い

私がQ L Tの存在を知ったのは1990年かもう少し後であったことを思い出す。Q L Tが発足してすでに10年近く経過していたことになる。私は当時勤めていた会社から、神奈川県中小企業団体中央会が主催していた「青年経営者ゼミナール」に派遣されて参加

した。このゼミナールの講師が海老澤栄一先生であった。ここで初めて先生にお会いした。私の属したこの社会人ゼミナールは海老澤先生の命名により通称“J E M S”と名乗った。まだ若かった私は自分の無知を省みず、先生やJ E M Sの仲間に対し果敢に議論を挑んだものである。

時期を同じくして当時の海老澤先生の講座の学生達が社会人の集団を集めて「いいねっ」となるコンソーシアムを立ち上げた。学生が企画した研究集会に、学生の呼びかけによって社会人の集団が参加し、統一テーマを中心にして、各集団が自発的に思いを述べるコンソーシアムであった。私はここで初めてQ L Tなる、不思議な集団に出会ったのであった。萩原さん、品川さんとの最初の出会いがどんなものであったか、強烈な印象は残っていない。今思い起こせば、これがQ L Tの真髄のひとつなのである。さりげなく存在し、されどある強い共生の概念を持っている仲間

ということであろうか。

そのころのQ L Tはこのおふた方と海老澤先生のほかにも何人もメンバーがいらっしやうと記憶している。ある日海老澤先生からQ L Tのために横浜近辺で交通の便のよいところに会議室のような場所を紹介してもらえないかという相談があった。私はここで柿崎さんを紹介することになるのである。柿崎さんの勤めている会社は割合便利な場所にあったし、柿崎さんにQ L Tを紹介しようと思い、すぐに先生に連絡をとった。1992年の春先だったと記憶している。このようなご縁で柿崎さんがQ L Tに入会したのである。

当時の私の仲間はQ L Tのことを“あのQ L T”と呼んでいた。誰が言い出したのかは知らないが、いつの間にか皆そう呼ぶようになった。“あの”という言葉に秘められた意味は、

- 1 不思議なメンバー
- 2 何を勉強しているのか理解できない
- 3 それゆえの強い畏敬の念

という表現で一応言い表せているのではないかと思う。その“あのQ L T”に、後に私がお世話になるとは当時夢にも思えなかったのである。

柿崎さんがQ L Tの仲間に入った後、私はQ L Tのメンバーとは毎年何回か「いいねっ」と研究集会などで会うだけであった。どうも哲学を勉強しているらしいという程度の理解で、それ以上に近づく機会がないままにな

ってしまった。私はエクステンションゼミナール終了の後も、有志で海老澤先生の指導を仰いでいた。今思うと、チャーチマン、ボームなど当時まったく知らない分野の本を読んでは、これはとても理解できない世界であると感じて、それ以上に突っ込んで興味を持つことがないままになった。1995年前後のことだと記憶している。

2 入 会

J E M Sという名称を引き継いで自主的に続けてきた勉強会は、2000年の末に一旦解散することになった。主催者や組織形態、メンバーに何度か変化はあったものの、10年以上も経営学を中心に据えて海老澤先生のご指導を仰いでいたことになる。

2001年は、私は定期的な研究会に参加することなく、1年を過ごした。自分なりにセミナーなどに参加して人の話を聞いたり、また本も多少は読んだけど、この1年は本当に空白であった。2002年も同じようなスタートであったと記憶している。そして、その年の春に再び品川さんや萩原さんから一緒に勉強してみないかと声をかけていただいた。自分が皆について行けるのかどうか、大変不安であった。一時は15人ほどのメンバーがいたと聞いていたQ L Tだが、私がお世話になろうとしていたこの時は、7人ということであった。人数が多ければ隅っこで様子眺めもできるが、この人数ではそうとも行かない。もう若気の至りと言ってもいられない

し、メンバーに迷惑だけはかけられない。

湯川さんは彼女が学生で海老澤ゼミに配属になったときから良く知っていたので、今回も面倒をかけるのは仕方が無い。坪内さんとは前からの知り合いだったから何とか許してもらうつもりであった。小澤伸光先生は以前に基調講演を一度だけ聴講したことがあるだけで、親しくお話をする機会も無かった。第一小澤先生は私のことなどご存じないはずで、どこに共通の目的を見出せばよいものか、まったく分からなかった。そんな自分が仲間に入れていただいて良いのかどうか、正直なところ不安でいっぱいだった。

3 冒 険

10月から新しい本を読むとの知らせを受け、ちょうどきりも良いことだし、思い切って初めてQLTの勉強会に参加した。シュツを勉強するのだということで、インターネットでさっそく本を注文した。ほとんど訳の分からないままに毎月1度のペースで参加しているうちに、翌年の春を迎えた。それでも主観性、他者理解、動機などこれまで深く考えたことのなかったいくつかの概念を学び直し、新しい世界の風を感じるようになっていたのだと思う。ついて行けなければ迷惑をかける前に下がればよいと決め込んで門を叩いたつもりであったが、気づかない間に後ろを見るような気持ちはどこかに消えてしまっていた。

この点もQLTの懐の深さだと自信を持っ

て紹介しておきたい。強引に引っ張るわけでもなし、しかし簡単に見捨てるでもなし、実際に経験した者でなければ理解しようのない間主観の世界が存在している。不思議な絆で結ばれているような感じである。

まったく予備知識のない私が3年間もQLTを続けられたのだから。私自身大変な冒険をしたものだと感じている。しかし私を誘ってお付き合いしてくれている方々はもっと冒険しているのではないだろうか。かなり危険な冒険だと私は思うのだが。

私は、QLTの絆は「冒険心」に尽きるのではないかと理解している。一緒に冒険をする仲間ではないかと思う。QLTの冒険は目的とするものを見つけるような冒険ではない。地平線のかなたを覗いてみようというような冒険である。地平線を見ることができれば普通の人はそこで満足すると思うのだが、QLTはそんなことでは満足しない。その先に何が見えるのかさらに覗きに行く。だからQLTに終わりはない。四半世紀にもわたって続けてこられた理由でもあろうと思う。そして、このような冒険をしているんだと言う相互理解が絆となっているのだと思う。そこがQLTの真髄であり、だからこそ不思議に感じていたのかも知れない。

しかしQLTがあらたな冒険を始めるときは恐ろしいほど大胆である。普段は静かに淡々と過ごしているようだが、いざとなると社会的に是認されている生活の枠組みなど気

にする様子もない。自由な精神の持ち主であるからこそその態度なのであろう。地平線のかたに何が見えるのか、何も予見していない。だから純粋に大胆になれる。

さて、2003年の4月からはいよいよシュッツの本物を読むことになった。毎月一度の勉強会というペースは結構きつい。一ヶ月で50ページ程度進めるのだが、3回読んでもさっぱり分からない。それでも勉強会に出席して先輩方の解説を聞くと解ったような気になる。8月31日には、残暑の三浦海岸で熱い合宿に取り組んだ。日曜日の朝集まり夜中までずっと議論をする。夜は飲み会のはずが、その飲み会でも議論は尽きない。和気あいあいの中にもどんな時でも真摯な姿勢は崩さない。実生活と学びとを決して切り離さない。昼間シュッツから学んだことをすぐに実践に繋げようとする。時には実に赤裸々である。このようなQLTの合宿に、QLTの本質を見たような気がする。翌朝合宿所から会社に向かう時は、昨日とは少し変わった自分を感じるのである。

その後もシュッツを読み続けて年内に完読した。2004年はメルロ＝ポンティを読むということになった。これも何のことだかさっぱり分からない。正直なところ、今もまだよく分からない。意識の深みに沈殿したさまざまな契機を解きほぐす作業だということのようだが、そんなものは解きほぐしたくないと思いたくなる時もしばしばだ。すらすらと

理解する仲間がうらやましい。

2004年9月5日、箱根大平台にある対岳荘での2度目の合宿に参加した。昨年と同じ日曜日を利用した1泊2日であった。この合宿ではメルロ＝ポンティを置いておいて、「21世紀の資本主義論」を読破することになった。この種の本もきちんと勉強するのは初めてのことである。温泉に浸かって夕食をいただいた後も、またもや討論会が始まる。翌朝は5時に起きて朝風呂に入って6時の電車で下山し、そのまま会社へ直行という具合であった。経験をしたことのない人は、何が楽しくてそんなことまで、と思われることだろう。同じ時間を同じ場所で経験した者でなければ理解できない世界なのである。

以上が、入会してから今日までの私が経験したQLTである。お世話になって本当に良かったと思っている。

4 虚 心

ここでQLTの偉大さに少し触れてみようと思う。QLTはことさら自らを主張するようなことはなく、組織としてつつしんで静かに存在している感すらある。淡々悠々としていて、むしろ融和と協調を楽しんでいるかのようなのである。大地にしっかりと根の張った木が、どんな風雨にも悠然と枝葉を任せているがごとくである。しかし、メンバーはお互いの心の壁に触れるような精神で繋がる関係がある。自分の主張より先に相手を受け入れる。謙虚な精神の持ち主である。この謙虚な姿勢

があるから四半世紀もの長い間、冒険を続けることができたのであろう。

そして思考の冒険を始めるときは、これが謙虚で柔らかな人たちの集団なのかと疑うほど確固たる信念に基づいていることに気が付く。社会的に自明視されているようなことにも自ら進んで覗き込んで捉えなおそうする。生半可な常識など通用しない。地平線のかなたを覗いて見ようと、考えられるあらゆる冒険するのである。そういう意味で勇敢な精神の持ち主なのだと思う。

社会生活の中で、己を中心にしておかないと生きては行けないのではないかと思えるような人を時々見かける。絶対的な座標の持ち主である。それに対して、Q L Tの構成員は相対座標を理解する。右があるから左がある、あるいは君がいるから私がいるというような、相対的なとらえ方ができる。そして全ての相対的な関係を受け入れようとする。だからメンバーは若い。そしてリバーシブルである。ある意味で本当の自由な精神の持ち主の集まりではないかと思う。

相対的な関係を重視することが、優柔不断であることとは違う。ゆらいでいても揺れてはいないのである。ある重みを持ってしっかりと存在している。勝敗、優劣、上下などで社会生活を発想する人々がいるが、Q L Tのメンバーはその正反対である。その種のことにはまったくと言って良いほど無頓着である。競争から逃れているのではない。無意味な競

争はしないのである。競争より協創を重んじる。だから揺れることはない。強い精神の持ち主なのだと思う。

5 継 続

それではQ L Tはこれからどこへ向かおうとしているのであろうか。私は、Q L Tはいつでも地平線を見ているのではないかと思う。決して同じ地平線ではない。大人と子供で視線が違うように、若者と老人で視点が違うように、Q L Tのメンバーは決して同じものを同じように捉えてはいない。むしろ違いを楽しんでいる。

Q L Tでの学びの時間は結局のところ自分と向き合う時間であるとも言える。穏やかで落ち着いた集いの時間は、深い洞察を含んでいる時もあるし、濃厚なジョークで大笑いする時もある。ユーモアのセンスが溢れている。他人が見れば何が楽しいのか、何がおかしいのか理解できないであろう。勉強会が始まって、飲み会が終わるまでずっとおかしい。帰りの電車の中でもおかしい。周りの迷惑も顧みず大笑いすることもある。翌朝起きてもまだおかしい。こんなにおかしい集団がほかに在るのだろうかと思うほど、とにかく楽しくておかしいのである。夜中に一人で本を読むのはちょっとつらい。しかしこのおかしさには替え難いものがある。だから継続するのだと感じている。

Q L Tがどこへ行くのかは誰にも分からない。ただ、地平線のかなたを見ようとしてい

るのは確かだ。地平線の先に見えるものは新たな地平線であろう。昨日まで見ていた地平線とは少し違った地平線であると思う。

Q L Tの真の偉大さは、継続である。「継続は力なり」という言葉がある。Q L Tにぴたりと当てはまる言葉ではないだろうか。ただ、力を求めて継続してきたのではないはずだ。気負わず、しかし一心に続けてきたのだと思う。だからどこへ行くのかは分からないけれども、Q L Tは今後も継続するであろう。Q L Tの精神が継続するのだと思う。姿かたちを変えながら四半世紀も継続してきたのだから、この先どこまで継続するのか、誠に楽しみである。地平線が見えている限り継続するのである。

6 感謝

Q L Tで随筆集を作るとの知らせがあり、私に何ができるのかと考えた。最初に述べたようにまだ4年目の新前ゆえ、Q L Tを自分のもののよう記述するのは僭越至極である。そうかといって決して部外者ではない。あれこれ思いをめぐらせて至った結果この拙文となった。

私の心の中に存在するQ L Tは以上のようなものである。私なりの感想や展望も記したつもりである。これからも謙虚な気持ちで学びの場に参加させてもらいたいと思っている。

Q L Tに入会するまでに会った多くの仲間にもこの紙面をお借りして心から感謝の気持ちを伝えたい。私なりのご縁と学びがあっ

て、このような作文をする機会が与えられた。誠に有難いことである。それぞれの場で活躍されていることを思い浮かべながらご健闘をお祈りする。

Q L Tに在籍した諸先輩方にも感謝の気持ちを伝えたい。この貴重なQ L Tを継続させる原動力となったはずだ。多くの方々の顔が浮かぶ。私が一番得をしたのだと思う。誠に有難い。

今まさにお世話になっているQ L Tの諸先輩にも深く感謝していることをお伝えしたい。仲間に加えていただけたものと勝手に理解して、一人前の顔をしている自分に気付く。ちょっと恥ずかしい気持ちである。しかし、同時に同じ空間に存在したものでなければ理解し得ない世界が私の心の奥底に沈殿し始めていることはご理解いただきたい。

海老澤先生に初めてお会いしたのは、私が36歳の時で、それ以来一貫してご指導を仰いでいる。先生との出会いがなければ全く違った人生になっていたであろうと思う。出会いは必ず自己変容を含んでいる。それほど深くお付き合いさせていただいた。心から謝意を表したい。

おわりに

Q L Tはいつでも感謝の心で満ち溢れている。謙虚で勇敢で自由で、感謝の気持ちを忘れない。何よりすばらしいことである。実に不思議な魅力ある集団だと思う。感謝の心の持ち主に対して未来は完全に開かれている。